周辺地域の集落類型

石　村　満　宏

1　はじめに

今日，周辺地域の典型である離島各地では，結果的に人口の大幅減・過疎化という現象が顕著であり，地域社会存続のための力は衰微の一途をたどっていることは間違いない事実であろう。地域社会が存続しつづけるためには，地域環境を持続的に維持発展させることが必要不可欠の条件であるといえよう。

榧根（2000）は，その第１章で環境問題に関して，『風土の概念の重要性の主張は二元論以前の自然主義的な日本的母型への回帰を意味していない。逆に，近代科学に欠如していた自然と人間との関係性の問題を再浮上させて，「風土の倫理」をポスト近代の倫理として主張することにある。』と述べ，風土の倫理を風土の論理とすべきであるとしている。

この主旨に沿う形で展開する，同書各論中第12章農業地理学（田林明）では，農業･農村の持続的発展について，他を引用する形で，「・・さらに農業を行なう場所，すなわち農村自体の持続性が問題にされるようになっている。」とし，「過疎によるコミュニティの弱体化，旧来の自然管理システムの喪失による災害の多発と修復の困難，優秀な農業労働力の流失，家族の分散と高齢者世帯の増加，嫁不足など多くの問題が生じて」おり，「持続的農村形成が不可欠である。」と主張し，しからば「その持続的農業・農村とはいかなるものであるか，その実現のためにはどのような地域の条件が必要なのかを明らかにすることが，地理学に課された課題であろう。」と展望している。

この個別課題解明の基調となる先の榧根の論理が示されているとすれば，具体的な論点解明の展開がまたれている。同じ2000年，秋季学術大会・日本地理学会公開シンポジウムの発表・討論要旨にも同様の主旨が述べられている。

これらを踏まえて，地域社会の維持存続を考えるには，地域のその場に住み，そこに生きようとする人々の生き方又は生活様式がその場に生きるにふさわしいものかどうか，またその営みが本来その場が持っている発展の可能性の許容する方向にあるのかを確認する視点が求められているのではないかと思われる。

そこでここでは地域住民の具体的な場である集落を単位とし，その場にいかに生きようとしてきたかを検証し，そこから地域住民が共同して生きようとする時，内部的に醸成されてくる内発力，すなわち人地一体となった場所の力なるものの存在について考えてみようと思う。これは地域環境を持続的に保持し発展していく重要な力であると考える。

2　場所のもつ意味

場所のもつ意味をどうとらえればいいのだろうか。堀（1997）はこのことについて，『・　・その場所に住みついた人間と，かれらがつくる社会があり，生活が広がっている。「場所」がもっている総合性，複合性，地理的な位置のおきかえを許さない個別性と唯一性，そして固有の歴史性への関心は重要である。』といい，『場所の理解とは対象化された人間や自然，あるいは環境が，その「場所」で互いに同一化しているさまを理解することであろう。これが風土的理解であろう。』と述べている。

人々は自分にとっての，その場所の意味あいを，その時々の生活体験を通してつくり上げていくものであり，それは時間とともに変化するし，納得して受け入れない限り，生れないものでもある。その上で場所のもつ意味あいが個人（または集落等の集団）の共通認識となった時，個人または集団の「場所」が成立し，個人または集団の生きた風土が生れるということになろう。

場所のもつ意味あいを理解することは，風土的理解の上になりたった具体地域像であるといえよう。

3　場所の喪失と確認

種子島は移住集落の島と言われる程に移住集落が多い。その立地は，旧村落のほとんどが低位の海岸段丘か小沖積低地に位置し，交通条件を含む生活条件に比較的恵まれているのに対し，明治以降の移住集落のほとんどは，内陸部の隆起波蝕台地に散在している。

例えば，大崎―田之脇構造線以北には国上丘陵地とよばれる隆起波蝕台地があり，北西方向にゆるやかに傾き，やがて大隅海峡に没するが，この地域に存在する集落は，浦田，奥，中目，寺之門，湊の５集落を除けば，久保田，大久保，白石，桜園，上古田，野木平，柳原，又延等いずれも，明治以降の移住者によって形成された集落である。その故郷は桜島，甑島，奄美諸島，坊泊等にあり，火山，気象などの自然災害や戦争によって移住を余儀なくされた人たちであった。

故郷に「場所」を見出していた日々，ある日突然長年住み慣れた故郷を捨てざるを得なくなった住民が味わう「場所」の喪失感，そして未知の開拓地に「場所」を見いださなければならなかったその後の確認作業の日々。

同様な事態は西之表市街地南部に広がる西之表波蝕台地上にもみられる。ここは平坦な種子島にあって，海抜282ｍの最高地点もあり，甲女，川脇，大川田，早稲田の各小河川に刻まれ分断された小台地丘陵地が続く地域である。通称中線道（県道76号線）が南北に縦貫したのは明治35年以降で，それまでは甲女川沿いの古田までの山道だけがわずかに道と呼べるものであったから，その開通以前から存在していた集落は明治17年，揖宿･山川からの移住者になる岳之田を除けば古田中之町，村之町（十番）だけであった。

七番，十三番，十五番，十六番（中割）は二十番（中種子町域）とともに道路開設工事に伴う作業基点であり，労働者集積地いわゆる飯場の置かれた名残りの地である。道路開通後島内外からの移住者によって新しく形成された集落である。

この「番」地名集落のうち最大は十六番で，ここを中心に生姜山，万波，千段峯で新しく中割（小）学校区を形成するに至った。古田地区にも上之町，

鹿之峯，二本松等の移住集落が新しく形成されたから，この地域の集落のほとんどは移住集落ということになる。

この地の移住者の故郷も，桜島（大正３年の噴火災害による），甑島（明治19年の飢饉による），奄美諸島（多くは太平洋戦争による）他に宮崎，四国等であり，その多くは移住を余儀なくされた人々である。

その中にあって，静岡からの移住民になる番屋峯はその事情をやや異にする集落である。通称中線道開設時の明治35年，初代郡長だった牧野氏は職を辞して郷里静岡県小笠郡に帰り，種子島の古田地区が茶栽培に適した土地であることを広め，移住をすすめた。事前の入念な下見調査と土地分譲交渉成立のもとで，明治42年松下（助），栗田，松下（清）の３氏が入植，茶の種子持参であったと伝えられている。故郷小笠郡，城東郡でも，農家の次三男対策は困難であったようで，押し出す側の要因は存在していた訳であるが，入植するその場所がもっている持続的展開の可能性を確認している点に注目しなければならない。

4　移住集落の変容過程と「場所」

中割地区は大正３年（1914）の桜島大噴火に被災した島民の緊急移住によって形成されたものである。当初238戸，1,389人の集団で，１戸あたり約１町歩（１ ha）の原野が供与された。農業開拓と木炭生産による換金によって生計を立てていたが，やはり結果的にはここを永住地として留まる人は極めて少なかった。持続的な農村の形成には至らなかったといえる。この場にいかにして生きようかと考えるよりも，より条件のいい国上地区への再移転や鹿児島本土へ帰還するという行動が多く見られた。

農林業センサスによれば，1970年農家戸数31戸，非農家戸数８戸であり，その後も減少して，2000年農家戸数10戸，非農家戸数15戸となっている。同時に農家人口についてみると，1970年男63人（うち15～59歳は32人），女68人（うち15～59歳は30人）であり，これが2000年には男（うち15～59歳は６人），女10人（うち15～59歳は３人）へといずれも大幅な減少を示し，入植

当初の面影は少なくとも人口の上からは消えてしまったといわざるを得ない。現在では非農家が農家数を上回り，農家人口のいずれの数値も1/6～1/10程度に激減しており，とくに女性の減少が目立っている。農家男性の結婚難は一般的傾向とは言え，ここではすでに遅すぎた感がある。

農業集落の諸機能についても，その機能の低下ぶりが伺える。

A）構成員の寄合回数は2回と少なく（低平地の旧村落では5～6回が通常），

B）棚田・谷地田，C）山林，D）河川・水路等の定期的な保全作業への取り組みはなされておらず，

E）祭など伝統的な集落行事もカウントされていない状況である。

現状をみる限り，開拓集落として形成された初期の「場所」は急速に衰退し，今は道路交通通過地としてその存立意義を保っているとみられる。地域の環境とどう向かい折り合いをつけていくかは，そこに住む人にしかできない行為であるが，場所の力は極端に衰微している状態であることは確かである。

ただ，ここに至るまでには，移住者に対する厳しい現実があったことは間違いない。何よりも緊急移住は，移住地決定が先で，一般的に移住先に対する情報が少なく，その土地に対する真実の場所のイメージが描きにくいという事実がある。故郷の今までの生活や農業経営体系をそのまま導入するのは無理とわかっていても対応はなかなか困難である。開拓初期における向井氏など島民の厚い支援も伝承されているが，大多数の移住者達にとっては，離島の山間隔地は永住を決意するには余りにも異なったイメージの場所であったと思われる。仮の場所，一時避難の場所として位置づけたに留まってしまったから，それ以上積極的に環境への働きかけもなかったと思われる。

ただ新しい学校区の成立など，そのアイデンティティが醸成される可能性も存在し，今まで希薄だった場所への愛着心を補強する契機もあったが，連帯して集落をつくり上げるという意識には醸成されなかった。そこに留まりそこに一体化しようとする執着がなくなると，そこを引きあげて出ることも入植時と変わらないほど容易なことになろう。

最近の新潟地震復興過程における被災者の行動についても，故郷への帰還

をあきらめて新たに生きる場所を求める道を選択した人達，逆にあらゆる手段を尽してでも帰還の途を選択した人達，両者には故郷に対する場所の力がバラバラであったとは思いがたい。やむを得ず故郷を離れて暮らす決意を下した人達の場所への喪失感は大きいものであろう。

さて，しかしながら入植者個々人の努力，集団の努力が少なかったと断ずることは，次の２点を考慮してみる限りでも少々酷というべきであろう。それを超えた力が働く場合があるからである。

まず第１，社会の時代変革が急であったこと。緊急入植はまず生き抜くことに主眼があったが，社会は大きく変化をみせていた。戦争・敗戦・高度成長の激変期の荒波を受けては，自給的生活環境の構築を目ざした経営とは大きな隔たりがあったであろう。

次に開拓農業経営の問題である。例えば開拓農業振興制度のもと，示された標準開拓農家の経営モデルは１戸あたり畑地16反，採草地２反，薪炭林３反，馬１頭，乳牛１頭，鶏20羽，山羊１頭というものだったが，ほとんどの農家は達成できなかった。

その他にもイ）帰農組合，開拓農業への組織化，ロ）農産物加工システムの育成，ハ）作物選択（経営組織）の助言などが行なわれたが明確な成果には乏しかった。たとえば甘蔗栽培について，さとうきび単作も奨励される時代になっても，この中割地区はとくに霜害を受けやすく，基幹作物となりえなかったなどこの暖地性作物にとっては丁度気候限界地にあった不運も重なった。

地域には外部からいろいろな力が強制的に働いてくる。その力はここにすむ人が求めている生き方にふさわしい方向の力ではないかも知れない。行政組織から連なる各種制度には時に過酷なほどに強い力を見せつける。戦後開拓地に示された離農対策，人口流動化対策はその代表である。

１）昭和36年過剰入植者対策は零細開拓農家を農業から切り離し工業労働者として送り出そうとする産業化政策であり，同時に残存農家に土地を集積して規模拡大を図らせるというものであった。

2）昭和39年にはさらに明らかな離農対策が実施された。その名も離農助成対策である。開拓農業制度の終末期は高度経済成長期の真只中にあり，公的資金を投じて，負債で身動きのできない農家や開拓農協を救済・解散をさせ，開拓行政に終止符をうったのである。

経済の成長という外部からの影響は，商品化という力で場所の力にせまってくる。小さな地域に特別な力が及べば抗する力はないのである。こうして明治から近年まで続いた緊急開拓村の歴史は風前の灯となるに至った。

番屋峯は，既に述べたとおり，明治42年静岡県からの移住によって形成された集落である。それは地区内他集落の移住契機が自然災害などの被災者緊急救済的性格をもっているのに対し，入植の契機が大きく異なる特徴をもっている。すなわち

1）県外の比較農業先進地からの移住であること。

2）入植が被災者援助の緊急避難的性格でなく平時の移住であったこと。

3）次・三男対策の側面が強かったこと。

4）入植地をよく知る信頼できる人物の紹介だったこと。

5）茶の栽培を基本とする人物だけの明確な営農目的をもった集団だったこと。

6）このために適切な土地条件かを事前に現地調査して確認していること。

7）その上で旧い集落（親村的性格）の共有林10町歩を30年間借地契約していること。

8）明治42年9月に先遣隊としてまず3戸を送り出していること。

9）茶の種子を持参し，11月にはさっそく播種していること。

10）その後の経過を見ながら順次入植が進み合計9戸となり，以来現在に至るまで集落の農家構成員はこの3～4世代にあたること。

入植に際し，入植先の確かな情報を得て綿密な計画と実地検分があり，堅実な土地に対するイメージを描きあげた上での入植であったこと等他の例と大きく異なっていた。

最近の状況を農林業センサスによってみると，1970年農家数20戸，75年18戸，2000年17戸とこの30年間に３戸の減少にとどまっている。農家人口も当然ほとんど変動がみられず，70年男47人が75年40人と減じて後ほとんど変わらず2000年41人である。女も同様で70年50人が現在46人となっている。

この30年間農家の減少が最小限にとどまり，農家人口もほとんど変動がないというのは，離島過疎地帯においては極めて特殊な事例である。農家の減少が少ないのは，この間の１戸あたりの耕地面積が飛躍的に拡大しているのも大きな要因である。75年1.04ha から85年1.85ha に2000年には3.15ha に拡大している。

とくに80～90年代に，比較的小規模農家群の規模拡大には村をあげて取り組んだ実績がある。集落メンバーは運命共同体であるという精神のもと，農家間の格差を最小限にとどめるような配慮がなされた。

一般的には，上記のように規模拡大を図る場合，大規模農家はますますその規模を拡大し，逆に小規模農家は規模を縮少してやがて脱落していくケースが多く見られるのであるがこの集落では違う。すなわち，規模の大きい上位農家は自己所有地の拡大によって自力で拡大を図るが，概して３ ha 以下の農家層は規模拡大をとりあえず借入地によっている。

借入地のほとんどは，古田地区の共有林を借入れて，共同開墾した場合が多い。比較的平坦な丘陵地にある共同開墾した園地はまず小規模農家の希望者に充てられ規模拡大を促す仕組みである。こうして集落全体の底上げを図り，脱落を防ぐねらいがある。

入植以来，村人は一貫して全構成員共同歩調をとる姿勢が基本になっており，その絆は極めて固い。古田地区は西之表市においても特に人口減少率の高い地区の１つで，この30年間の減少率は50％を越えている。親村的存在であった旧い集落を含め地区の集落はいずれも過疎と高齢化に悩んでいるから，番屋峯の古田地区における存在感はますます高まり，ついに旧集落との地位を逆転している状況が生れている。特に子どもの多いこの村は学校関係行事・ＰＴＡ活動の主力を担い，人材が後継者として地元に残り，地区の活動

にも積極的に参加することになると地区民からは頼りにされ，その結果地区の主導権はおのずとこの集落の手中にあるというわけである。かくして経営耕地の規模拡大につながる旧い集落との共有地借入れ相談についても希望がかないやすいということになる。

集落内では全戸が運命共同体的な思考をもっているが，他方全戸が競争相手でもあるようだ。各戸は優良茶の生産を目指して土と茶の木と天候に絶えず注意を怠らない。

A農家は3世代家族，義務教育の子2人，高齢の両親は繁忙期には加勢もしてくれる。3.5haの茶園・わずかな自給菜園もある。栽培品種は極早生まつみどり5a，早生くりたわせ1.5ha，次いでゆたかみどり33a，あさつゆ12a，そしてやぶきた1.2haとやぶきた，くりわたせを2大主力にその他を組み合わせた栽培体系は，他家でもほぼ同様，この集落の最適栽培体系と考えられる。品種による収穫適期のわずかな違いが労働の平準化を可能にしている。他方多品種栽培は気象気候などの自然条件，病虫害に対する微妙な違いによって危険の分散を図ること。多品種栽培はまた新品種に更新する機会を増やす契機となる。栽培技術のマンネリ化を防ぐことにつながる。

3月19日極早生の収穫始まり。1600kg余の生茶は荒茶にすれば430kg，故郷の静岡茶市場，静岡中央製茶に出荷。3月30日からくりわたせの摘茶始まり，すべての品種の1番茶を刈り終えたのは4月26日だから，もう1ヶ月余も刈りとり作業が続いた。この頃4月17日の走り新茶の市場価格は3,000円程度に下がった。初荷は2万円だったから，その価格変動の大きさに驚く。2番茶まで40日間，この間整枝，夏肥やり，防除作業が控えている。5月下旬2番茶の収穫，また40日のうちに一連の作業が待っている。6月下旬に3番茶，梅雨の頃だ。4番茶をとり終えたらもう旧盆を迎える。旧盆仏を送ったらすぐに秋の管理作業が始まる。堆肥の投入，中耕，防除，敷草と続くが採草作業もある10月ももう終る。正月が明けると春肥やり，2月再度施肥して最後の防除作業，芽出し肥えをやって新芽の春を迎えることになる。

自然と人と季節が織りなす風土の暦，入植の歴史的事実は遠くに去ってこ

の地にあたかも古くから存在する「場所」となり，周囲と一体となった風景が展開している。

5 小活

ここでは集落類型と題したが，典型事例2例を示すにとどまった。しかし，地域住民の日常具体の場である集落を単位に，その場にいかに生きようとしてきたか，そこに共同して生きようとする時あらわれる内的力が，どのように醸成されるのか，消え去るのか，人地一体となり得る場所の力なるものの存在について考えてみた。地域の持続的展開，決して急激な発展でない展開力こそが地域のもつ力なのかも知れない。

とり上げた一方の中割地区は，残念ながら，その場所の力なるものがいか程のエネルギーをもつものか否定的にならざるを得ない状況であった。しかし現今，小泉政権の規制緩和策の1つとして「からいも特区」なる農業特区に指定された。製菓業者や土建業者の参入で地域がどのように変化するのか，加えて今この地区の目の前にジェット機も離発着可能な新空港が建設されほとんど開港を待つのみの状況となった。典型的な交通不便地帯だった付近にフライト農業の夢すら膨らむ時を迎えている。とことん過疎地が大逆転，島一番の注目地区に様変わりしようとしている。その時どのような人達がどのような場所を創ろうとしているのだろうか。かつてこの地に夢を持とうとした旧村人達はどのような思いでこの地を見つめ何を思いおこすのだろうか。この地はどのような変革をするのであろうか注目していきたい。

参考文献・資料

石村満宏　2005　主要作物からみた地域特性・鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集61：59－70

石村満宏　2003　薩南諸島の地域性と甘蔗作物・鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集57：75—87

鹿児島大学多島圏研究センター　2001　『海と陸のはざまでの「場所の力」－南九州と南の島からの視座―』121P

榧根　勇　2000　『日本における地理学の現状と21世紀への展望』科研費研究成果報告書

能勢正之　2002　鹿児島県における戦後開拓地の地理学的研究―熊毛地区における戦後開拓地の変貌・鹿児島地理27－50　鹿児島地理学研究会

堀　信行　1997　風土の三角形・岩波講座文化人類学第２巻『環境の人類史』　79－106　岩波書店

山本正三　2000　最近における農業・農村地域の変化に関する研究の一視点・地理学評論　73：147－160